

「層人間」そうにんげん

部活帰り。校門が近づいてくると、じわじわと切なさが押し寄せてくる。

帰りたくない気持ちと、帰らないといけない現実。その狭間ではさま気持ちが揺れて、わざとゆっくり歩いたりする。門を出てしまうと、なんだか二度と戻ってこれられないような思いにもなる。

それでも、学校への未練を引きずりながら、生徒たちは散り散りになっていく。おれも自転車に跨またがって、部活仲間と群れをなして帰りはじめる。ときに、ぐずぐずとコンビニに寄ってみたり。

ときに、本屋の前にたむろしてみたり。

やがて再び自転車を走らせて、ひとり、またひとりと手を振りながら離れていく。

道行く車のヘッドライトが、薄暗くなった道を黄色く照らす。赤いテールランプがぼつぼつとも灯る。

話題も少なくなってきたころ、おれはNと二人だけになっている。Nは学校から一番遠いところ

に住んでいて、二番目に遠いおれと、いつも最後に残るのだ。

じゃあな、N。

夜風を切り、そう言って家に向かう坂を下りていくのが、一日を締めくくるやり取りだ。これまでも、そしてこれから、同じ毎日はずづいていく――。

そんなNに、ずっと聞こうと思っっていることがあった。

なぜだかNは、下校途中でいろんな人に手を振っているのだった。

もちろん、一緒に帰っているやつにはない。

Nの視線の先を一瞥いちべつすると、高校生らしい人影がNに向かって手を振り返して去っていくのだ。

ほかの学校の友達だろうかと思いつながら、なんとなく、聞く機会を逃していた。

けれど、ある日、休み時間に話題が途切れたのをきっかけに、おれはNに尋ねてみた。

あの去っていく人影たちは、いったい誰なのか、と。

「いや、あれは……」

Nはなぜだか、言葉を濁した。

おれが黙ってつづきを待っていると、Nはさらに、しどろもどろになっていった。

「友達っていうか、なんていうか……」

「どこ高のやつ？」

「どこって……E高と言えばそうだけど……」

「おれらと同じ？　なんだ、なら早く言つてよ。

何年のやつ？」

頭の中に、E高男子の顔がスライドされる。

が、依然としてNは煮え切らない表情のままだった。

「いやあ……」

込み入った話なら、聞かないほうがいいこともある。でも、そういう感じでもなさそうだった。

しつこく尋ねているうちに、Nはようやく話しはじめた。

「じつは……あいつらは全部おれなんだよ」

「なんだって？」

予期せぬ言葉に、おれは目を白黒させた。

「全部、N……?」

「まあ、この際だからお前にだけは言うけどさ……うちは特殊な家系なんだ」

声を潜めて、Nはつづける。

「自分自身をいろんな層に分けられる、層人間っていう一族で」

「そうにんげん……」

おれは混乱するばかりだった。

Nは、しばらく考える様子を見せたあとで言った。

「どう言ったらいいのか……いまの自分、つまりおれ自身は、たくさん層が重なり合って成り立ってる存在で。逆に言うと、分身の術みたいに、いつでも層ごとに自分を分けることができるんだよ」

信じがたい思いの中で、おれは多重人格みたいなものだろうかと考えた。

「いや、精神的なものじゃなくて、物理的なものなんだ。いつでも自分を分離できたり統合できたりするってわけ。まあ、層に分かれれば分かれる

ほど、ひとりひとりのおれの存在感は薄くなっちゃうだけだよ」

ということは、と、おれは尋ねる。

「いつも手を振って途中で別れてるやつらは、お前から分離した層たちだってこと……?」

Nは深く頷いた。うなず

おれは下校のときの光景を改めて思い返す。言われてみれば、思い当たる節がある。人影たちのシルエツトが、とてもNと似ているのだった。

「……でも、なんでわざわざ層に分かれたりするんだよ」

存在感が薄くなるのだったらなおさらじゃないかと、素朴な疑問が湧いてきた。

「勉強のためさ」

Nは言う。

「高校になって授業のレベルが一気に上がったただろ? だから層ごとに担当教科を決めて、集中して勉強するようにしてるんだ。部活をやっていると余計に使える時間には限りがあるから、やむをえず」

なるほどと思いつつ、おれは内心、もやもやするところがあった。というのも、フェアじゃない、と感じたからだ。

自分は家に帰ってから、それなりにハードな生活を送っている。食事、入浴、仮眠。そのあとで、ひとり膨大な宿題と格闘するのだ。もしNの言うことが本当ならば、そんなに素晴らしい話はない。

「羨ましいなあ……」

おれは思わず呟いた。

「だから、みんなには黙ってるんだ」

Nは顔を曇らせる。

「おれだって、別に好きで層人間に生まれたわけじゃない。でも、生まれたからには宝の持ち腐れもよくないなと思って。だから感謝しながら恩恵に与^{あずか}ってるってわけなんだけど、こんな話を人にして嫌味なだけだったのも分かってる。それで、みんなには隠してて……」

ううん、と、おれは言葉が出ない。たしかに、変な言いがかりをつけて絡んでくるやつは出てきそうだ。

ただ、少しだけNに同情的な感情が芽生えた反面、妬む気持ちは拭いきれなかった。

「でも、これはこれで、少しは苦労もあるんだよ」

おれの内心を察してか、Nは口を開く。

「都合のいい話ばかりじゃなくてね。層によつてはサボったりするやつもいるんだから、なかなかうまくいかないのが現状で」

「サボる？」

「いくら分離されたとしても、元は同じってこと。残念ながら、おれはおれだからさ……」

Nは苦笑を浮かべる。

「体育とか部活とかのスポーツ担当のスポーツ層は、積極的に練習したりしてくれる。でも、数学担当の数学層はサボりがちで。すぐ集中力が切れて、漫画を読んだり携帯をいじったりするんだよ。親に見つかって怒られるのも、だいたいそいつでね」

親、という言葉が引っ掛かったので聞いてみた。「親御さんも層人間ってやつなの？」

「母親の家系がね。うちの母親はしばらく分離してなかったんだけど、おれの進学に合わせて勉強に専念できるようにって層に分かれてくれて。いまはおれと母親の層が二つセットになって、いろんなところに住んでるんだ。だから、家がたくさんある状態だね。おれは下校の途中で分離して、それぞれの家に帰ってくんだ。そしてまた朝の通学で順々に合流して行って、校門をくぐるまでにひとつに統合されるってわけだよ」

なんだかややこしい話だなあと、おれは思った。「そんな面倒なことなんかせずに、みんな一緒に住めばいいじゃないか」

「それができればいいんだけどねえ。層たちが集まったら場所もとるし、一緒にいると、ついつい喋りたくなくなるだろ？ しゃべいろんな意味で、別の場所に住むほうが効率的なんだよ」

おれは自分が一度にたくさんいる様子を想像してみた。

食事、入浴、仮眠……たしかに、大勢で同時にこなすのはスペース的に難しそうだ。お互い気が

合うのも当たり前だから、雑談ばかりで何も捗はかどらない気もする。それならば、いっそ離れて住むほうがよさそうだ。

「……だけど、やっぱり羨ましいよ」

おれは素直な気持ちでNに伝える。

「この先、いろんなことで役に立つだろうしなあ……」

大学に行ったら、やりたいことが増えるに決まってる。勉強は置いておいても、遊びに飲み会、旅行だって、ひとりですべてカバーするには時間が足りない。

社会に出ても、同じようなものなんじゃないか、とも思う。層になって自分が増える分だけかかるお金も増えるだろうけど、それを差し引いてもお釣りは十分だ。

でも、と、おれは戻って考える。

下校途中、薄闇の中で手を振りながら自分自身
が離れていくのを眺めるのは、いったいどういう
気分なのだろうか。友達でさえ二度と会えないよ
うな気になって、胸がきゅっと締めつけられる。

声を掛けて引き留めて、もう少しだけ話していたい。そんな気持ちになってしまう。

ましてやNの場合は、自分と毎日別れているのだ。想像するだけで不安になる。それとも同じ自分なのだから、どうってことはないのだろうか……。

黄色いヘッドライトと赤いテールランプに満たされた世界。そこにNのシルエットがいくつも浮かぶのを想像して、おれはしんみりした気持ちになっっていた。

「……今度からは、おれも彼らに手を振ってもいいかな？」

Nは不思議そうな顔をして、曖昧に首を縦に振る。やがて話題は別のことへと移っていった。

ある朝、Nが冴えない顔をしていたので声を掛けた。

「どうかした？」

一限目は体育の授業だ。

体育のとき、Nは一番楽しそうな顔をする。その理由が、いまのおれには分かっている。Nの中のスポーツ層が疼くうずのだろう。でも、ときどきNは、その体育を休んで見学することがある。一限目のときに限って多く、ずっと不可解に思っていた。

そしてまさに、いまNの様子が妙なだった。

「それが、困ったことになってさ……」

教室の窓から、Nは校門のほうにちらちら目をやっている。

「体操着でも忘れた？」

「いや、それくらいの忘れ物ならいいんだけど……」

落ち着かない様子でNはつづける。

「今日の朝、合流地点に層のひとりがこなくって。そいつがいないと、体育の授業はお手上げ状態。すっかり運動音痴になるんだよ」

「まさか、スポーツ層のやつが……？」

察したおれに、Nは頷く。

「そうなんだ。一限目のときだけは頼むからって

散々言ってるんだけどさ。絶対、寝坊するなっ
て」